

6 ニコロ・マッサの解剖学——権威と新知見の両立

澤井 直

順天堂大学医学部解剖学・生体構造科学講座

ニコロ・マッサ (Nicolo Massa, 1485–1569) は、16世紀前半のヴェネツィアの医師である。パドヴァ大学で学位を取得後、開業医として活躍して尊敬を集めるとともに、解剖示説に携わり、フランス病 (=梅毒) に関する著作や論理学あるいはアヴィセンナの伝記などの著作も残している。

マッサの著作の中で、最も有名になったのはヴェネツィアで出版された『解剖学入門書』(Liber introductorius anatomiae, 1539) である。1559年にも同内容のものが出版されている。この入門書は216頁からなり、図版はなく、文字テキストによって人体解剖についての知見を簡潔にまとめている。

『解剖学入門書』が出版された時期は解剖学・解剖学書が大きく変化しているときであった。1525年にガレノスのギリシア語原典全集とそれに基づくラテン語訳が出版され、中世以来の『モンディーノ解剖学』やアラビア由来の医学書を中心とした解剖学から、『解剖指南』(De anatomicis administrationibus) や『諸部分の用途』(De usu partium) を始めとするガレノスの解剖学書を重視する解剖学へ移行する時期である。さらに、様々な制約がありながらも、遺体を用いた解剖示説も行われ、人々の注目を集めていた。

マッサの『解剖学入門書』はこのような時代の中で、旧来の解剖学と変化しつつある解剖学の両方の要素が混在している。第一に、アラビアの権威は、ヒポクラテスとガレノスと同じく解剖学における権威の一人として肯定的に扱われている。これはパリ大学などで見られた、アラビア由来の用語や知見を排除してギリシアの権威を重視する姿勢とは異なっている。第二に、マッサの著作の8年後に出版されたヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514–1564) の『ファブリカ』(De humani corporis fabrica, 1543) を頂点とする、実地に観察を行うという姿勢もマッサの中に見受けられる。

この権威と観察という要素はヴェサリウスやその周辺の解剖学者にとって大きな問題を引き起こした。ヴェサリウスは観察重視という姿勢そのものはガレノスから受け継ぎ、その結果としてガレノスが記した知見とヴェサリウス自身の観察結果に齟齬がある場合は、自らの観察結果を優先した。そして単に観察結果を優先させるだけではなく、ガレノスの記述が人体ではなく動物の構造に基づいていることを示し、自らの判断の妥当性を高めている。これらのことから、ヴェサリウスが新たな解剖学の幕開けとされている。

パリ大学でヴェサリウスを指導したイェコブス・シルヴィウス (Jacobus Sylvius, 1478–1555) はヴェサリウスによる古代の権威の否定に対抗して、ガレノスを擁護する。その場合も、ヴェサリウスの観察結果を否定してガレノスの権威を守るのではなかった。ヴェサリウスの観察結果がシルヴィウス自身の観察結果とも一致することを認めたとうえで、ガレノスの記述と観察との齟齬を、ガレノスの誤りや動物と人体との混同ではなく、人体そのものの変化に求める。

ではヴェサリウスやシルヴィウスに生じた権威と観察の対立という観点からマッサを眺めた場合に、どのような関係が見出されるのであろうか。マッサにおいては権威の見解と観察との齟齬が即座に権威の否定には結びついていない。マッサの人体構造の記載の中には、耳小骨と前立腺の最初期の記述や鼠径管や虫垂などの、ガレノスの見解と異なるものも見られる。しかし、マッサにおいてガレノスらの古代の権威は尊重されるべき存在であり続けている。

マッサの『解剖学入門書』は、16世紀前半における解剖学の変化という文脈において興味深い事例を提供する。